

高齢者施設における 「お薬減らすゾウ教室」の実践と評価

百 賢二 ●昭和医科大学 統括薬剤部／薬学部 病院薬剤学講座 臨床研究部門 准教授



高齢者施設において臨床薬剤師が薬の相談を受けている様子

地域医療貢献のポイント

本研究において、高齢者施設におけるポリファーマシー、処方薬に関する利用者の理解度を明らかにすることができる。これまで高齢者施設における医薬品の使用に関する情報は十分に明らかになっているとは言えず、本研究において記述的に実態を評価することは意義がある。加えて、本研究を通じて地域の中で減薬の取り組みが成功すれば、地域医療に貢献するアカデミアの取り組みとして、新たな可能性を提案することが可能となる。

1. 背景と目的

国民皆保険制度である我が国では、ピラミッド型の人口比率であった50年前と比べ、働き盛り世代の割合が減少し、総人口の約30%を占める高齢者の介護、医療費負担が困難な状況である。

過去数十年にわたり、平均寿命も世界トップクラスを維持していることは注目すべき点であるが、一方で、諸先進国と比べて病院へ受診しやすい点、医薬品へのアクセスがフリーである点など、医療費の観点から日本が抱える課題は大きく、特に有害事象を発

症しやすい高齢者については、総合的な処方薬のレビューと処方適正化が必要である。本研究では、高齢者施設における臨床薬剤師による個別相談および集団指導を実践する。

2. 取り組みの方法

本研究では、高齢者施設(株式会社クラチの関連施設)をフィールドとして実施する。具体的には、以下の2点を実施する。

- (1)利用者個々を対象としたインタビュー調査に基づくナラティブな分析
- (2)集団を対象としたレクチャーに関する満足度、理解度に関するアンケート調査

3. 期待される成果

国内でのポリファーマシー、不適切処方に関する調査は多いものの、実際の活動と連携した報告は少ない。本研究では、これまで我々が取り組んできた「お薬減らすゾウ教室」を高齢者施設で実施することで、以下の点が期待できる。

- (1)お薬相談のための薬剤師の訪問または介入が、高齢者の不必要な医薬品投与の減薬につながる。
- (2)減薬により、高齢者に発生する医薬品関連の有害事象は減少することが知られており、我々の取り組みにおいても有害事象の減少が期待される。
- (3)地域連携により、出張型お薬相談会(我々は「お薬減らすゾウ教室」と呼称)が、広く高齢者の健康増進に寄与する可能性を示唆できる。